

子ども達がA児の喜ぶことをしたい

未就園の会に参加していたA児が3歳になり入園してきたことにより、4.5歳児は喜ぶことをしたいと考え保育士は、A児への思いを実現したいと子ども達と一緒に考えました。

【事例1】

≪保育士の思い≫A児が安心して遊んでほしい
～A児は「だだんだん」が大好き～

A児の興味関心を持てる様々な環境を
子ども達と一緒に作ってみよう



保育士の関わり

保育士が子どものお気に入りや安心できる環境を作ることで、興味関心を持ち子ども同士の関わりが始まります。

【事例2】

≪保育士の思い≫一人一人の思いを出し合ってお友だちの考えを聞いてほしい

塗り絵
もらった！

チューリップも
らった！

A児は「だだんだん」が
すきだから「だだんだん」
をつくってあげたい！

A児の好きなもの
つくれほしい！

サークルタイムでみんな
が輪になったら思い
を出しやすいかな

みんなの思いや考え
を絵に描いて見せた
らわかりやすいかな

みんなは、保育園に入った時
年上のお友だちからしてもら
ってうれしかったことある？

保育士の関わり

子ども達の思いに寄り添いながら、一人一人の思いが出せるように環境や支援を行うことで、子ども達から「A児の喜ぶことをしてあげたい」との思いがたくさん出てきました。子ども達の思いを大切にしながら行事を考え進めていきます。

【事例3】

《保育士の思い》年下の子への思いを大切に、一人一人のアイデアを出しあいながら作ってほしい

子ども達がいつでも作り出せるよう身近な日用品を準備・作る時間・試す時間・凶鑑も用意しよう

「だんだん」の足の形
これならいいかな

これならいいかな



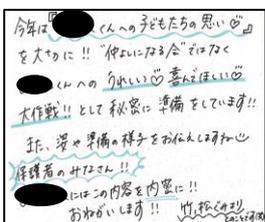
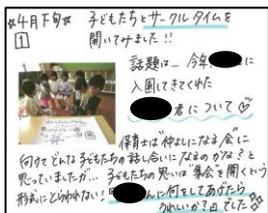
保育士の関わり

保育士が身近な日用品を用意し・時間配分や空間利用等必要に応じて環境を整えていくことで、子どもの選択肢が広がり、自ら「やりたい」思いを行動に出せるよう支援します。

【事例4】

《保育士の思い》

恒例となっている「仲良しの会」と称した集会は、子どもの意見が反映されて進めてきていることを保護者に知ってもらうことで、子どもが主体となって作り上げている活動の広がりをリアルに伝えたい
その方法として活動の経緯が見えるドキュメンテーションを活用していく



保育士の関わり

子ども達の様子を保護者にドキュメンテーションで伝えることで、子ども達のA児への思いやその時の子ども同士のやり取り、様子が細かく伝わります。

【事例5】

《保育士の思い》

子ども達が自ら机を出し始めている。何をするのか様子を見守ってみよう

今日、
A児休み？

あっ！でもチャンス
じゃない？
作戦会議できるじゃん



A児いなくて
淋しいね

子ども達、机を出し始める
けど何するのか
様子を見守ってみよう

保育士の関わり

サークルタイムを重ねていく中で、何か必要で何を用意したら良いのか、子ども自ら必要な物を準備する姿が見られるようになりました。保育士は、声をかけたくないですが、子どもの行動や状況のタイミングを図りながら最後まで見守る姿勢も大切です。

《A児はみんなが作ってくれたプレゼントを付け大喜び》大好きな「だだんだん」に変身！



〈考察〉

保育士は、一人一人の子どもの姿を捉えながら安心できる人間関係、保育環境作りが大切であり、何より温かな保育士の存在が一番大切な環境となります。子ども達のやりたい事や思いを受容的、応答的に関わる中で安心感や信頼感を得て、安心して自分の思いをサークルタイムで伝えたり、様々なアイデアを出すことができ「A児を喜ばせたい」とみんなの思いに繋がっていったのではないかと思います。サークルタイムを積み重ねる中で自分たちが机を準備するなど見通しを持つようになってきました。保育士は、子ども達の思いを認めたり、共感したり、寄り添いやりたい思いを大切に声を掛け、安心、安全に環境を整えながら子ども達への温かな視線や信頼を持って姿を見守り、援助していくことで意欲や主体性が育まれていくのではないかと思います。

優しさいっぱいの異年齢ルー

全園児 10名の異年齢保育です。誕生会のイベントは誕生児自身が行いたいことを決めます。当月は誕生者からルーをしたいという声があり、走る順番や組み合わせ等のやり方も子どもに任せて、みんなでルーをして遊ぶことにしました。すると、子ども達は同年齢同士で走らず異年齢が対戦する組み合わせをしてスタートに並びました。発達の違いから走る速さは歴然です。保育士は「勝負はどうなるんだろう。」と、先のことを考えながらも、子どもの行動を最後まで応援し見守ることにしました。

【事例1】 ～培った優しさ～

いっしょにはしろ

日々積み上げた友達との関係。年上の子にしてもらった優しさが年々受け継がれています



年長児は全力を出してのルーの勝負はしませんでした。前もって約束をした訳ではないのに、どの子も小さい友達の様子に合わせて速さを調整し、並走したり、途中で止まってしまった2歳児のところに駆け寄って抱きかかえたり、寄り添い励まそうとする姿がありました。



結果ルーの勝敗は引き分け。子ども達の表情には、ほっこり笑みが浮かんでいました。毎日一緒に生活をする中で培った年長児の、年少児に対する優しさや、思いやりの心が自然と表れたこと、その成長に驚き、嬉しく思いました。しかしこのルーは勝負に負けて悲しい思いをする年少児がいなかった一方で、中には「本気で勝負をしたい」という年長児の思いもあるのではないだろうかと思惟しました。そこで次は年長児だけでかけっこをすることを保育士側から提案してみました。

【事例2】 ～本気を引き出す～

年長児のかけっこには、友達との勝ち負けにこだわらなかつた子ども達の思いを汲みつつ、思いきり走る気持ち良さも味わってほしいという思いから、ルールを一つ提案しました。それは、「頑張って走った 9 月の運動会の時の自分より速く走ること」。自分に勝つレースです。みんなの目の色が変わり、本気で走りました。そして年長児の真剣勝負の走りはすごくカッコよかった。年長児のかけっこを見終えた小さい友達は、誰からともなく全員が自分からスタート位置に並んでいました。年長組の本気の走りに触発されて幼い心にも火がついたようです。

思い思いのスタート姿勢に意欲が見てとれます
この瞬間が大切
見逃さずに次の活動につなげます

はやいスタートは、これでしょ！

つぎ、わたしたち
いくよ



先程のルールでは途中で動かなくなった2歳児も自らスタートダッシュ！全員のやる気が前傾姿勢に表れています



そこで次は全員でかけっこをしました。思いきり走った後は最高の笑顔がはじけていました。保育士や友達との信頼関係を基盤にしながら、自ら選んで行うことの充実感や満足感を体験しています。

保育士の関わり

日常の活動時から、子どもの思いを汲み取りながら、子どもが自ら選択したり、決定したいする機会を増やしてきました。今回は誕生会のイベントとして誕生児に選択の決定権がありました。指導する者の思いはまず胸の内に置き、ルールや方法等、11レーの組立て等子どもの思いを優先しました。最後まで子どもに任せ、失敗も大いにできるようにすること、子どもの心に寄り添い、困った時は一緒に考え、必要に応じてアドバイスをすることが大切です。

< 考察 >

本来子どもはやるとなったら手加減しません。ルールや勝敗のある活動から、勝つ喜びや、負けた悔しさ等自分の揺れ動く感情を確かなものにしていきます。今年年長児が主体的に行った小さな友達への配慮は、日々の異年齢保育の中から芽生えた社会性であると感じました。集団生活の中で子ども達は刺激を受け合い、影響し合い、育ち合います。子ども同士で試行錯誤する姿を見守り、安心して自己を発揮できる場を保障することで、子ども達はさらに自信をつけ、次の活動意欲へとつながっていくと考えます。また、今回は小さい友達に配慮するのみでなく、思い切り走る姿を見せたことで、年長児の満足感、園全体の活動意欲、充実感がさらに高まったと思います。子どもの状況に寄り添って活動を加えてみたことで気づかされた場面でもあったように思います。

待ってよかった（2歳児）

新年度から自由遊びの時間に、ピアノの伴奏に合わせたリズム遊びを楽しんでいます。継続してきた活動から、保育士がピアノの伴奏を始めると、子ども達はピアノの音に反応して、自ら体を動かすようになりました。子どもが行動している時は、保育士の声か子どもの行動の妨げにならないよう、最小限に留めるよう心掛けています。4月2歳クラスに新入園児が入所しました。



発達の段階から養護的な関わりが必要な時期です

特にA児は環境に慣れるまでに十分ゆったりとした時間と保育士との信頼感が重要です

A児にとって無理のない本人がやりたいと行動できるまで、保育士はA児が安心のもてる丁寧な関りを大事にしています



どんぐりどんぐり
ころころ

みんなとやる場所は違いますが、A児がみんなの動きを見て体を動かしている姿が見られました。



ピョンピョン
ジャンプ

後でA児に「うさぎとどんぐりやってたね」と声をかけました

A児は頬を膨らませて「うんうん」と頷き、嬉しそうなお褒めな表情でした

A児もやりたい気持ちが出てきたのかもしれませんが

本児からやり始めた姿があったので、その姿を認めたり褒めたりして

自信につながるようになっています



保育士の関わり

子どもは身近な保育士に自分をまるごと受け止めてもらえることを実感し初めて安心して生活を送ることが出来ます。子どもがどんなことを感じてどのようなことを行動にしたいか等、子どもに関心を寄せ応答的に関わる存在であることが大事です。

< 考察 >

保育士は日常から子どもの気持ちを尊重し丁寧な対応を心がけてきました。そういったことから、子どもは少しずつ安心して生活が送れるようになりました。

集団の活動もみんなと一緒に無理強いせず、子どもがしたくなる、やってみたくなるまで、そういう気持ちを持てるまで待ちました。ただ待つのではなく、タイミングを見知り、状況や必要に応じて、聞いてみたり、誘ってみたり、声がけやアドバイスも提案してきました。今回、子どもの意見が尊重されたという経験がもっとやってみたいにつながってきたように思います。

子どものやってみたい、してみたいが、行動に移せることで「自分でやってもいい。」「自分が決めて自分でできる。」という確信に繋がりました。このことから保育士の柔軟な視点をもった対応と多角的な子どものみといが必要です。